

036 いろおとこ 040520

いろおとこ（色男・色女）講座

みなさん 塗り絵をして ます目に 色を入れるだけ 塗り絵だよ

色のセンスアップ 色のことがわかる 色の感性があがってくる

隣の色同士の響きあい 隣と隣の間にもうひとつ 色をいれると もっと響きあう

どうぞ どんどん センスがよくなっていくように いくつも創ってみよう

白い画用紙を 用意して ます目を 作ってみよう

オイルパステル・色鉛筆・水彩絵の具 用意した

ます目は えんぴつでも 黒ペンでも なんでもいいよ

ます目は 定規をあてても フリーハンド でもいいよ

オイルパステルを 使ってみよう 子ども用のクレヨンだよ

はみだしても いい 白いところが残っても いい 白います目があっても いい

色鉛筆を 使ってみよう

色鉛筆と オイルパステルと 水彩絵の具 みんな混ぜても いいよ

水彩絵の具を 使ってみよう 筆と 水と パレットが要るねえ

水彩絵の具は 濡れているうちは ほかの色と 混ぜないように しょう 色が混ざると 汚いよ

さあ できあがった たった 一枚 もっと 創ってよ

言っておくけど ぜったい いいものは ない 完全なものは ない

その時 その場で いいとしても 時が経て 場所が変われば いいとは限らない

自分が いいと思っても 人がいいとは 思わないかも

そうなんだ ぜったい なんてないんだ だからおもしろい

この講座 10年ぐらい前から どこかでやってみたいと 思っていたが 実現しなかった

色のことが必要な専門家のセンスが悪い 色を決められない 色を感じられない

「いい服を買ったが スカーフの色が決められない」

「いい建物をデザインしたが ドアの色が 決められない」

そんなことでは格好が悪いよね オレのことを聞いて 何度もやってみよう 何度も試してみよう

創ったものの 「コンセプト というのかな 能書き」も忘れないでね

こんなことで 色のセンスが良くなるかな

◎古事記に載っている、「海幸彦・山幸彦」の話を読んで、浦島太郎の説話を思い出す。この話は奈良時代からあった。当時は漢字で書かれ、漢字の読める上流階級のもので、難しいものだったそうだ。古事記は、「浦島太郎」の説話を原点にして書かれたものなのかな。

むかしむかし あるところに 浦島太郎という若者がいました
浦島太郎が海辺を通りかかると 子供たちが大きな亀を捕まえて いじめていました
「おやおや かわいそう にがしておやり」「いやだよ」亀は涙を流していました
「それではお金をあげるから 売っておくれ」「売ってやるよ」浦島太郎は 亀を海に逃がしてやりました
二三日経って 「うらしまさん 浦島さん」と呼ぶ声がします
海から頭を出した亀が 「おかげで 命が 助かりました」
「竜宮へ 行ったことが ありますか」「私が お連れします」「さあ 背中に 乗ってください」
亀は 浦島太郎を背中に乗せて 海の中を潜っていきました
海の中は 青い光 揺れるコンブ 赤いサンゴ
立派な御殿に着きました 乙姫様が 色とりどりの魚たちと 迎えてくれました
「ようこそ 浦島太郎様 よくぞ亀を 助けてくれました どうぞ ゆっくりしてください」
浦島太郎が席に座ると 魚たちが つぎから次に ごちそうを運んできます
演奏が流れ タイやヒラメの舞い踊りが続きます
まるで天国のような日々が続きます
乙姫が 「もっと居てください」 「このまま ここで 暮らして ください」
「いえいえ 乙姫様 私は 帰ります」
「おなごりおいしいですが おみやげに 玉手箱を 差し上げます 決して 開けては なりません」
浦島太郎は亀の背に乗って 海岸に帰ってきました
「おや 三年の間に このあたりは変わってしまった・・・」浦島太郎が 老人に尋ねると
「七百年前に 浦島太郎という人が 海に出たきり 帰らなかった そうですよ」「・・・」
浦島太郎は 玉手箱を開けてしまいました
もくもく煙が出て 浦島太郎は 髪の毛が真っ白な老人になってしまいました

◎オレがこの話を何度も聞かされていた 1950 年前後は、TV がなかった時代、画像は映画館の中にしかなかった。自分で絵本を読んだり、昔話を聞かせてもらったりしていたと思う。何の疑問も感じずに、面白い話だと納得して楽しんでた。乙姫様の羽衣や、タイやヒラメの舞い踊り、というような画像はのちのち、当時の説話やおとぎ話が、TV の番組として登場し、その画像が頭に焼き付き、「輝きも 色も形も あんな光景だろう」と想像していた。それから何年か経ち、オレもたまには夜の世界を覗きに行ったことがある、それこそ一張羅の服を着ておずおずと連れて行かれた。バーやキャバレーの光の点滅、若いオレと同世代のきらびやかな衣装を羽織ったお姉さんたち、というおさだまりの光景だ。

考えるに、浦島太郎が陥ったのは、乙姫様が居る宮殿という。太郎がそこで、王子様になったのか、タイやヒラメにかしずかれ、王子と姫という夫婦なら、それはそれで最高の幸せではないのかな。オレなら、過去を振り返って、帰らないね、なんていう色々不思議は、後の祭りだ。

◎夜の世界、酒と女の世界、ここには縁がなかったね。ちやほやされた覚えがないし、通ってみたいとも思わなかった。知人の何人かは、面白くてたまらん、という雰囲気、男前を気取って夜の街へ闊歩していた。迎え撃つお姉さんたちも、夕方になるとドレスアップして、颯爽とスカートをひらめかせて店へと急いでいた。

- ◎朝 7:30 自転車出家を出発。8:30 摂津峡下の口から歩き始めた。地図で調べた別のルートに登ってみたい。
- ◎コロナ禍の今、緊急事態宣言のさなか、「近所の山に登るぞ」とやってきた。月日のことなど右から左に忘れ去ってしまうのが日常だけれど、3/23 から展覧会があった。展覧会の中止を決めたのが一週間前、そのころはまだ、「できるか できないか」というぐらいに切迫していなかったが、今になって思えば、よくも中止を決定したものだ、胸なでおろしている。で歩くな、人と会わず、他府県に行くな、とほほである。
- ◎コロナ禍を欧米では戦争と呼んでいる、世界中、百万人単位で罹っている、十万単位で亡くなっている、とは聞いているが、大都会の真ん中に住んでいるオレのまわりには、患者はいない、うわさも聞かない。マスコミから、知人友人から、それぞれ雑多な意見を聞く、それほど雑多に活動しているウイルスのようだ。
- ◎晴れている、晴れているのだけれど白い雲が 8 割がた空を覆っている。この季節樹々の緑は濃くなってきた。一週間前の山は冷たい風を感じたが、今日は暑い、3.4 日前から暑い、温暖化現象が顔を出してきたかな。
- ◎摂津峡をすいすい通り越して、神峰山寺に向かう途中の田園地帯、狭い田んぼ、畝起こしが終わり、水を入れるばかり。畑も細々ある。畑で思い出したが、昨日近所で桃太郎トマトと豊作ゴーヤの苗を一本ずつ飢えた。
- ◎さあ、新しい道を、神峰山寺に向かわず歩き出したが、標識などはない。「これかな」思い切って聞いてみた。「行くみたいですよ お父さんも行った とか」村の墓の間を抜けて歩いた。この墓は懐かしい造り、屋根だけの土間はかつての焼き場だろう、鳥飼村の焼き場は壁があり一段低く掘られていた。高速の下をくぐり抜けて行くと、道が無くなるが踏み跡がある、赤いテープもある。「これだ 間違いない 無事登れますよう」
- ◎高架鉄塔がある、南南東に進んでいる。「まてよ オレは北に向かわなきゃ」と訝っていたが道は曲がりくねって北北東に向かい始めた。今回も地図を焼いてこなかった、帰った今、見ているばかりの体たらくである。
- ◎太い樹、大きい樹に縄が巻いてある。「神峰山寺修験道」という札が貼ってある。本山寺ではなく、神峰山寺の修行僧が走り回っているらしい。「そんなもん 山を走り回るだけなら オレなんか 悟りきっているぞ」
- ◎シカを 2 頭見た。鳥の声もする、「ホケキョ」が多いが、「ピーピー」もいる。コバルトブルーの鳥はなんだ、逃げない、飼われていたやつなのかな。帰って調べると、「ルリビタキ」のようだ。
- ◎三番目か四番目か、鉄塔の下、「飯が 腐ると いけないねえ」早い目の昼飯。電線は 2 時 8 時方向に流れている。「おお 萩谷の変電所 横の白い建物は 関大かな 向こうに千里中央の高層ビル」
- ◎11 時に、いつもの道と合流した。ほとんど本山寺に近いところだ。「ここから降りたら どこへ」いつも気になって、思っていたところだった。しっかりした道がついていた、右へ左へいくつか分かれていたが、「まちがえたら 引き返せばいい」と気軽に登った。さすがにこの道では、誰とも会わなかった。
- ◎12 時山頂に着いた。7.8 人の人がいた、前回来た時ほどの賑わいはない。緊急事態宣言、最初のころは、行くところもなく、近所の山にでもという人出だったのだろう。そう思っていたが、復路はいつもの道を行くと、本山寺の駐車場が閉じられている。「あれれ」と進むと、神峰山寺の駐車場も全部閉じられていた。
- ◎12:30 出発。飯はすでに終わっているのだから、「パンでも」と喰いだすと、ザックの中身を全部平らげてしまった。こういう時は、もう少し菓子でも、果物でも、入れておくべきだと反省。水も飲んだ。カメラも写した。人がいなきゃスケッチブックを出してラクガキをすればよかった、とこれまた反省。
- ◎水が足りない、本山寺でボトルに水を入れた。冷たくて旨いが、たぶん川の水だろう。ザックに水や茶は 1.5L 持参したが、暑いと水分の消費が大きい。上に水場がない山は、ザックの重さと、水の欲しさのバランスだ。
- ◎1:30 神峰山寺の駐車場までやってきた。閉じられている。GW の時は、たくさんの車、山の中もたくさんの人で、「山好きな人が こんなにいるのか」という状態だったが、今日のここは、下から歩く健脚の山だ。
- ◎山は花がなかった、ツツジやシャクナゲが咲いていたが、オレの琴線には触れなかった。カエデの葉っぱ、えんじ色に紅葉したものが谷の下に、お椀を伏せたような若葉の見本が斜面の横にあった。
- ◎朝 7 時半に自転車で家を出て、夕方 4 時過ぎに帰り着いた。往路が 4 時間半、復路が 3 時間 40 分、てっぺんの休憩時間を入れて、8 時間半の山行でした。

◎「国学」という言葉が出てきた、知っているようで知らなかった。江戸中期に勃興した学問。賀茂真淵、本居宣長・平田篤胤らが有名。儒教・仏教・蘭学が盛んな時代、日本固有の精神、文化を明らかにする。神道、国史、歌学、語学、有職故実などを扱う。神道精神、国粹主義、尊王皇国、これらの言葉を聞くと、少しドキリとするが、好きじゃないが、もう少し読ませてもらおう。

◎小林秀雄著<本居宣長>の冒頭に、彼の墓の話、遺言状の話が出てくる。ネットで調べると、この遺言状、小林秀雄が本の冒頭に取り上げたことなどのよもやま話がわんさか出てくる。

◎遺言状には、忌日の決め方、納棺の詳細、沐浴やら髭剃りのこと、埋葬、葬送のこと、墓の設計図、後日の祥月命日の客膳のことまで書かれている。

◎世のしきたり通り、仏式に準じて行われることを指示している。

◎自身の遺骸は、生前みずから定めた山室山のもう一つの墓に、前夜秘かに葬るように指示している。

◎納棺についても、蓋の閉め方、釘の打ち方まで述べている。

◎毎月の祥月命日の供え物、その折、歌会を催すべきで、それらの客への支度は、「一汁一菜」だとか。

◎彼の墓は遺言状の指定通り、二つある。一つは当時の習慣に従って形式上のもので菩提寺にある。もう一つは、「他所他国之人、我等墓を尋ね候はば、妙樂寺を教え遣わし可申し候」戦後ほとんど訪れず人もないであろうところに、設計図通りに作られている。立派な桜が指示通りに植わっている。

◎この独創的な墓の設計は、遺言書に図で細かに指定されている。墓標には自筆の、「本居宣長之奥墓」の原稿、横に植える桜の木には、「花はさくら、桜は、山桜の、葉あかくてりて、ほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲たるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思われず」草稿がある。

◎ある方の解説では、国学の大家、中国の文化ではなく日本古来の文化を、と叫んできた本居宣長が、この遺言書では、死や葬送、後日の作法や残されたものへの考え方、「これは 儒教そのものである」とおっしゃる。

◎鈴木美紀著<墓と遺言状について思うこと>小林秀雄に学ぶ塾:同人誌 「好・信・楽」

◎私はなぜかこれまで、導入部の総論の文章に囚われてしまい、飽きもせずこの部分を眺めつづけている。

◎小林先生は宣長の遺言書について、「宣長らしい」という。墓については、「簡明、清潔で、美しい」という。

◎小林は、宣長の遺言書をまるで随筆と感じ、宣長の人柄をまことによく現し、思想の結実、独白、最後の著述といたいという。

◎小林は若いころから、宣長の世界へ壁抜けする意志はずっと持っていたと思う。そして一番間口が大きそうな、「古事記伝」から入ろうとしたけれどしっくりせず、「源氏」も試したけれど今一つで、付かず離れず遠巻きに眺めながら入り口を探し求めていたところ、あるとき遺言状と墓が、小林専用の宣長界への入り口に見え、まさにその時その扉が開いたのだと思う。

◎宣長は、「好・信・楽」の人であった。遺言書もそのような遊びの一端であり、でも本気であり、そしてたまたま時間的にも宣長の人生の終端に位置してしまったのである。小林は期せずして最後の作品となってしまった遺言書や、「枕の山」の桜の歌を、小作品だけれど宣長らしさが出てるとみなしているのではないかと思う。自分のことばかりを書いた遺言書を見て、小林は健全な思想家の姿が、そこにあるという。つまり遺言書の体裁をとった独白であり、信念の披瀝だというのである。そこには生き生きとした当時のその時の生の宣長の考え、肉声が、まるで瞬間冷凍されたかのように新鮮なまま残されていた、と小林は思えたのではないかと思う。

◎友人のウイルス専門家から、次のようなメールが届いた。「新型コロナウイルスは ほとんど コウモリのウイルスで 変幻自在 夜の闇から 突然現れる コウモリのです」この文章を読んで、この表現を感じて、嬉しくなった、これは詩だ、専門家もこれぐらいの表現をしてくれ、いいねえ。

◎小林秀雄著<本居宣長>

◎古事記と日本書紀では、古事記のどこが優れているのか・・・。

◎古事記と日本書紀では、その撰録上の意図がまるで異なる。宣長はこれを詳しく、確かに語った最初の学者である。古事記はただ古のことを伝えた古の言葉を失わぬことを、むねとしたものだが、日本書紀となると、この古事記の真っ正直なやりかたが、「あまりただありに飾りなくて かの漢（から）の国史どもにくらぶれば見だてなく浅々と聞ゆる」という見地にたったものだ。

◎我が国の歴史は、国語の内部から文字が生まれてくるのを待ってはくれず、帰化人に託して、外部から漢字をもたらした。歴史は、言ってみれば日本語を漢字で書くというできない相談を持ち込んだわけだが、そういう反省は事後のことで、まずそういう事件の新しさが、人々を圧倒したのであろう。

◎漢字には、国語に固有な国字がないこと・・・、もち込まれたのは、できない相談であったこと・・・、わが国上代の敏感な知識人なら、だれもが出会った一種特別な言語問題があった。

◎またまたここで、以前に調べたこの有名な歌をおもい出してみた。14個の漢字で記されている。

東野炎立所見而反見為者月西渡

ひんがしの のにかげろひの たつみえて かえりみすれば つきかたぶきぬ <江戸時代：賀茂真淵訳>
あずまのの けぶりのたてる ところみて かえりみすれば 月かたぶきぬ <鎌倉時代：仙覚>

万葉集が編纂された奈良時代は、かな文字ができる前なので、万葉集は元来漢字だけでつづる万葉仮名で書かれていた。一口に万葉仮名といっても、万葉集の初期には漢字の意味を当てはめた漢文調になっていた。それが徐々に漢字の意味を捨て発音だけを使うようになった。最後には一音一字で意味はほぼ無視の万葉仮名が完成する。それが平仮名になるのは、平安時代の古今和歌集を待たなければならない。

平安時代に書写された柿本人麻呂の歌は、詠みが空白になっていた。奈良時代のこの歌が、平安時代ですでに、どのように詠んでいたのか、どう発音されていたのか、わからなくなっていたのだ。

万葉仮名の例。山→他麻。春→波流。あ→安・阿・足・・・。く→久・苦・来・口・九・・・。

石川九揚先生：漢字は中国語をあらわす文字であった。もともと日本列島では、「やまとことば」が使われていた。中国から流入した文字・言語・文化の影響を受け、当時の日本語が、字として書き記されることによりはじめて、今の日本語が形成されていった。やまとことばと、のちの日本語とかなり異なるものであった。

◎調べてみた。中世、近代に、「古代の日本には 文字があった 漢字の前に 文字があった」と唱える人がいた。今は、古代の日本には、文字がなかったという意見が定説になっているらしい。記紀や風土記の原稿が、「ほんとに 口承だけかな」とも思う。記紀や風土記の時代よりちょっと前に、漢字は日本にやって来ていたといわれている。いずれにしても1万年以上も続いた縄文時代に、絵、記号、単語を表す模様、そんなものがあったかもしれない。

◎もう一つ、不思議に思うことが、古代人の言葉の話。これは調べたのではなくオレが思うことだ。ものの名称単語が生まれた、形容詞も生まれたが、それだけでは考えが伝わらない、想いが表現できない。一日の半分の闇の世界の中、月の光や、炎の色、人のぬくもりや、獣の気配、漂ってくる匂いや、うごめく虫、こんな状況の中、なにかを敏感に感じ取り、言葉が飛び交っていたのでは。「ぎゃ～ わわ」だけではなかったのでは・・・。

- ◎二か月ぶりの滋賀県の山、若狭駒ヶ岳を目指して車を走らせている。緊急事態宣言が解除されたが、まだ道路の電光掲示板には、「出歩くな 県境を越えるな」という文字が流れている。尾根道は滋賀・福井の県境なんで、兵庫県から来た人は、大阪、京都、滋賀、の四つということになるねえ。
- ◎同道は衣川・ゆうこのお二人さんが家まで迎えに来てくれた。「はい マスク」と渡され、くぐもった声でICレコーダーに向かっている。湖西道路を走りながら、「雲が多いね、予報と違って 天気が良くないね」「田んぼが 黄色いねえ もうすぐ麦刈り 田植えだね」
- ◎まわりの樹々の緑も、若葉の時を過ぎ濃くなってきている。紫色の花、フジだと思っていたが、キリの花だ。滋賀県に入るところどころにキリの花、山の中でもいくつも見た。
- ◎以前にも来たことがある、横谷峠で車を止めた。着替え、登山靴を履き、ザックを背負い、歩き出したが、「あれれ どっちだ こっちだ」と頭の中の磁場が回転して、自分の立ち位置を失ってしまった。地図の読めないおっさん状態である。「男は地図が読めるものだ」と思っているが、常々オレはこの方面が弱いのもかもしれないである。帰って今、地図を見ると、峠より尾根道までの急坂を北西に進み、尾根道を西に進みつつ大きく北に向かって時計回りに90度回転して駒ヶ岳に向かうという行程だ。ここの尾根道が、高島トレイルという名の、江若国境尾根である。今の滋賀県全部を近江と呼んだ。福井県は西武が若狭、東部が越前と呼んだ。
- ◎見上げれば、樹々の葉っぱが密に密に空を覆う。萌えだしたころと、夏の間ぐらいの緑の濃さだ。今日は白っぽい空、雨は降らないだろう空、シャツ2枚でちょうどいい快適さである。
- ◎「カッコー カッコー」ほう、長いあいだ鳴いている。「ホ〜」フクロウの声はすぐにやんだ。「ケキョ ケキョ」この声はあちこちから聞こえる。「チッチ チッチ」これもあちこちで聞こえるがなんという鳥かな、一種類だけかな。ゲラのキツツキ音がさかんに聞こえる。キツツキ音を真似してみるが、この回転数は異常に速く真似のできない回転数である。てっぺんにはカラスまでいた。トビも何匹か見た。
- ◎三叉路にやってきた。標識が立っている。前が駒ヶ岳、後ろが横谷峠。左に折れると池原山・足谷口となっている。以前は足谷口からも何度か登った覚えがある。川のそばに車を止め、急な坂を登った。途中で、イノシシの、糞場を見た。彼らは仲間全員で同じところにふんをする習慣があるのかな。
- ◎「おおお でかい樹だ 下のほうは緑のコケが青々と張り付いている、すぐに二俣にわかれ、またその上で二俣に分かれている、樹の大きさに圧倒されてしまったのか、まわりには樹が生えていない、素晴らしい樹だと思っていると、「なんだ ブナだ ブナの樹だ」木肌の模様がこれまた、いい雰囲気である。標高が700~800メートルの尾根道、谷からせりあがってくる樹々が密に並んでいる。冬になると幹と枝だけの景色だけれど、今は緑いっぱいの景色である。
- ◎なだらかで穏やかな尾根道、汗をかいているが涼しい風が心地いい。陽は照らない、青空はない、白い雲で覆われている。
- ◎池が見えた。池の水はきれいではないが、いつ来ても水が枯れたのを見たことがない。モリアオガエルの白い泡がいくつもぶら下がっている。水は、「飲める 澄んでいる」というにはほど遠いが、水の中の草木が陽に映え、雪に映え、紅葉に映えていつきてもいい感じだ。池の水はきれいではないといつつ、この池の存在は、オレに言わせれば、一見の価値あり、本当にいいものですぞ。
- ◎腹が減ったということで11時前だが昼飯を食った。「朝は5時前起き 5時の朝食 もうペコペコ」玄米飯に梅干しがすこぶる旨い。ちらり青空が、ちらりお陽さまが。この山全部、草はシカが喰ってしまったのか、土の上に木が生えている森だ。なだらかな尾根道、ずっと下まで見渡せる谷底、空気が旨い。
- ◎人がいない山にはいってくると、「おおお」と妙に気になる樹がいくつかある。異様に大きい、異様に太い、枯れていてもいい、倒れていてもいい、苔むし朽ちていてもいい、「おお どうしたんだい」「なんで ひっくりかえっている」「もうすぐ 姿が消えてなくなるかな 中まで腐ってきているかな」「ないか いうことないかね」「オレのことを どう思うかね」「いやあ 好きだねえ 惚れるねえ」

◎祝詞ぐらい皆さん知っていることかもしれないが、知らなかったオレがネットで仕入れた知識を書きます。

◎祝詞とは、祭典に奉仕する神職が神様に奏上する言葉。起源は古く、古事記でも、天の岩屋の段で、アマテラスが隠れた岩屋の前で、「布詔戸言：ふとのりとごと」を奏上した。神社本庁より。

◎我が国は、「言霊の幸う国：ことだまのさきわうくに」といいます。日本人は古くから、言葉には魂があると信じてきました。これを、「言霊：ことだま」といいます。

◎神様をお願いごとをする時や、感謝の気持ちを表すときには、「言霊」を込めて読み上げるというのが、祝詞の意味です。「言霊」は声に出したことがそのままかなうといえます。例えば忌み嫌われる言葉を話すと良くないことが起こり、逆に祝福の言葉で状況が好転するというものです。

祝詞を声に出して読むことを奏上するといえます。奏上することで一層のご加護があります。

◎古事記の中には、多数の歌が出てくるが、その表記は一時一音の仮名で統一されている。

◎古語の姿が、そのまま感じに書き移せるわけがない、そうと知りながら、強行したところに、どんな困難があらわれたか。国語を表記するのに、漢字の訓によるのと音によるのと二つの方法があったが、どちらを専用してもうまくいかない、と安萬侶は言う。

◎「しか言ふところは、全く仮名のみをもって書くは、字の数のこよなくおおくなりて、かの訓によって述べたるに比ぶれば、其の文さらに長しとなり」そこで、安萬侶は、「或は句の中、音訓を用い交え、或は、全く訓をもって録す（オレの訳：あっているかな?）」

◎稗田阿礼の読み習う古語を忠実に伝えるのが古事記の目的なら、宣長が言うように、理屈の上ではぜんぶ仮名書きにすればいいのは、大野安萬侶も承知していたであろう。

◎宣長は、古事記を考えるうえで、稗田阿礼の、「誦習：よみならひ」を非常に大切なことと見た。記録の編纂で、内容より表現にあったのであり、そのために阿礼の起用がどうしても必要となった。

「もし語りにかかはらず、ただにコトワリをのみ旨（むね）とせむには、記録をつくらしむとして、まず人の口によみならはし賜はむは、いたずらごとならずや」

コトワリとは、記録内容の意味で、内容だけなら、日本書記で事足りるという。内容より表現にあった。

◎折口信夫は、古事記は、口承文芸の台本とまで呼んでいる。古代の人々にとって、天から神様が降ってきて、言葉が下され、これに応じて、神々に申し上げる言葉が唱えられる。神から下される言葉が祝詞で、神に申し上げる言葉が宣命だ。

歴史は人々の生活を保証してくれるもので、その歴史を語り、伝承を続けていくと、村の生活が正しく、よくなっていくのであった。その語り伝えられた歴史の中で、もっともよく人々の間に守り続けられていったのは、神の歴史を説いたものである。現在残っているもので、一番神の歴史に近いのは、祝詞及び宣命である。

◎アイヌの口承文芸で 面白いものを見つけた。「地上世界創造の話」日本語訳

大海の中にオプタテシケ（大雪山）だけが顔を出していた。コタンカルカムイと妹が、雪を埋めて陸地を作った。＜略＞始めて人間をつくる時、何でつくったらいいかと雀を使って天の神の意をうかがわせた。天の神は木でつくったらいいと答えたが、のちになって石でつくったほうが、堅固でいいと考え、カワウソを呼んで、急いで下界に降り、コタンカルカムイにその旨を伝えるように命じた。然るに、カワウソは途中で魚の群れている淵にさしかかると、使命を忘れて夢中になって、魚を追いかけてまわし、そのため遅くなって伝令が間に合わなかった。そこで人間はついに木でつくられてしまい、そのため誰一人不朽の命を保つものはない。けれどもあとからあとから生じ、かつ成長し、また増殖するのもそのためである。なおその時、天の神が怒って、カワウソの頭を踏んだので、カワウソはあのように頭が押しつぶされたようになっているのである。

コロナ禍が始まったころ、「オレの日々は 変わらない 普段と同じだ」と思っていた。日々感染者数が増えだした。「自粛しよう 三密を避けよう」といわれ始め、それでも、感染者数の増加が止まらない、まだまだ満員電車、夜の飲食店街の賑わい、ますます感染者数の増加が止まらない。「非常事態宣言」の号令。外国の号令はもっとすごい。罰金に体罰、警察や軍隊の号令なのか、街には人っ子ひとりいない。日本も、街の中から人がいなくなって、食料品店やら、薬屋やら、だけしか開いていない。世のなかが動かなくなり、街がシーンとしたすと、おかしなもので、オレまでがシーンとした。オレまでシーンとしたしては、これではいけない、「前を向いて上を向いて 叫ばねば ぼやかねば ボ~としている場合じゃねえ」である。「絵と山だけだぞ」というスタイルは崩さないまでも、だらだらアトリエに籠りっきりはいけないと思い、朝飯のあとの、2~3時間は絵を描く、午前中は絵に専念と決めた。このスタイルはいいねえ、昼飯を喰ったらあとは自由時間。「おまえのは おまえが絵を描くのは 自由研究 自由時間 じゃねえか」と揶揄されてはいるが。昼飯を喰ってからは、河原に行ったり、街を自転車で走ったり、人とすれ違うのがいい、てなことを楽しんでいる。河原に行く時も、紙と鉛筆をポケットにしのばせた。河原の休憩・体操ポイントで座ってこれを書いた、ラクガキも描いた。

ショベルの音 パワーの音 重い音 つぶれる音

右からも 左からも エンジン音

せいじゃく なんて ないんだ とび交っている

上からも 下からも かな なにかを貫いて あっと いうまに 行ってしまう

電子だって 陽子だって X線だって 素粒子だって

紫外線も知ってるぞ ガンマー線も知ってるぞ

がんがん ごんごん ぶーぶー がちゃんごちゃん

音は ゆっくりやってくる 水の中には沈まない

どんどんどん 続いている

そらを見上げると ひこうき雲が 右前方から こっちにやって来ているなと思った

わくわくするねえ ひこうき雲はいいねえ くるねえ くるねえ こっちだ こっちだ

そこにうす黒い雲があって その中にかくれ でてくるぞ でてくるぞ まっていたが でてこない

ひこうき雲の白い線が どんどん ぼけてきた ぼけてきたと思ったら ただの煙になった

ただの煙まで 消えていった わわわ ただの空になった ひこうき雲が 消える日だ

かとりせんこうが ちらばっている ライターも落ちている

焚火のあとの燃えカス あれれ ここで宴会を したな

かとりせんこう それは なんですか と聞かれたら どう答える かな

かとりせんこう とはね か は モスキート の か

とり は 捕る ということで モスキート を やっつける ということですよ

せんこう とはね モスキートが嫌がる草を ぐちゃぐちゃして 粘土のようにして

それで ほそい棒をこねあげて ぐるぐる巻きにして ぐるぐる巻きを陽に干して

できあがった ぐるぐる巻きが かとりせんこう と呼ぶんですよ

そいつに火をつけると じわりじわり 火がついて じわりじわり灰になる

灰になる前に もくもく 煙を出す いやいや もくもくじゃないね

ふわりふわり だ ふわりふわり 煙を出す

モスキートは そのけむりが 嫌いだって 夏の夜に かとりせんこうに 火を つけるんだよ